最新調査成果が語る新潟市の歴史

# 新潟市遺跡発掘調査速報会2024

沈んだ砂丘と現代の道路と弥彦山･角田山（五番田遺跡）

**2025年**
**2月22日（土）**

会場　**新潟市民プラザ**

奈良時代の竪穴建物（茶院A遺跡）

漆器椀出土状況（馬堀上組遺跡）

## 目 次


プログラム・発掘調査遺跡位置図…… 表紙裏
講演「越後の中世・近世初期集落」…… 1p
五番田遺跡…… 6p
茶院Ａ遺跡…… 8p
馬堀上組遺跡 …… 12p
各遺跡の調査・現地説明会風景…… 裏表紙


主催　新潟市文化財センター

# 新潟市遺跡発掘調査速報会2024
## ～最新調査成果が語る新潟市の歴史～

**日　時：令和7年2月22日（土）　　会　場：新潟市民プラザ（NEXT21ビル6階）**

**プログラム**

13：00　　開　　会

13：00～13：10　　あいさつ　文化財センター所長　村山（むらやま）　明（あきら）

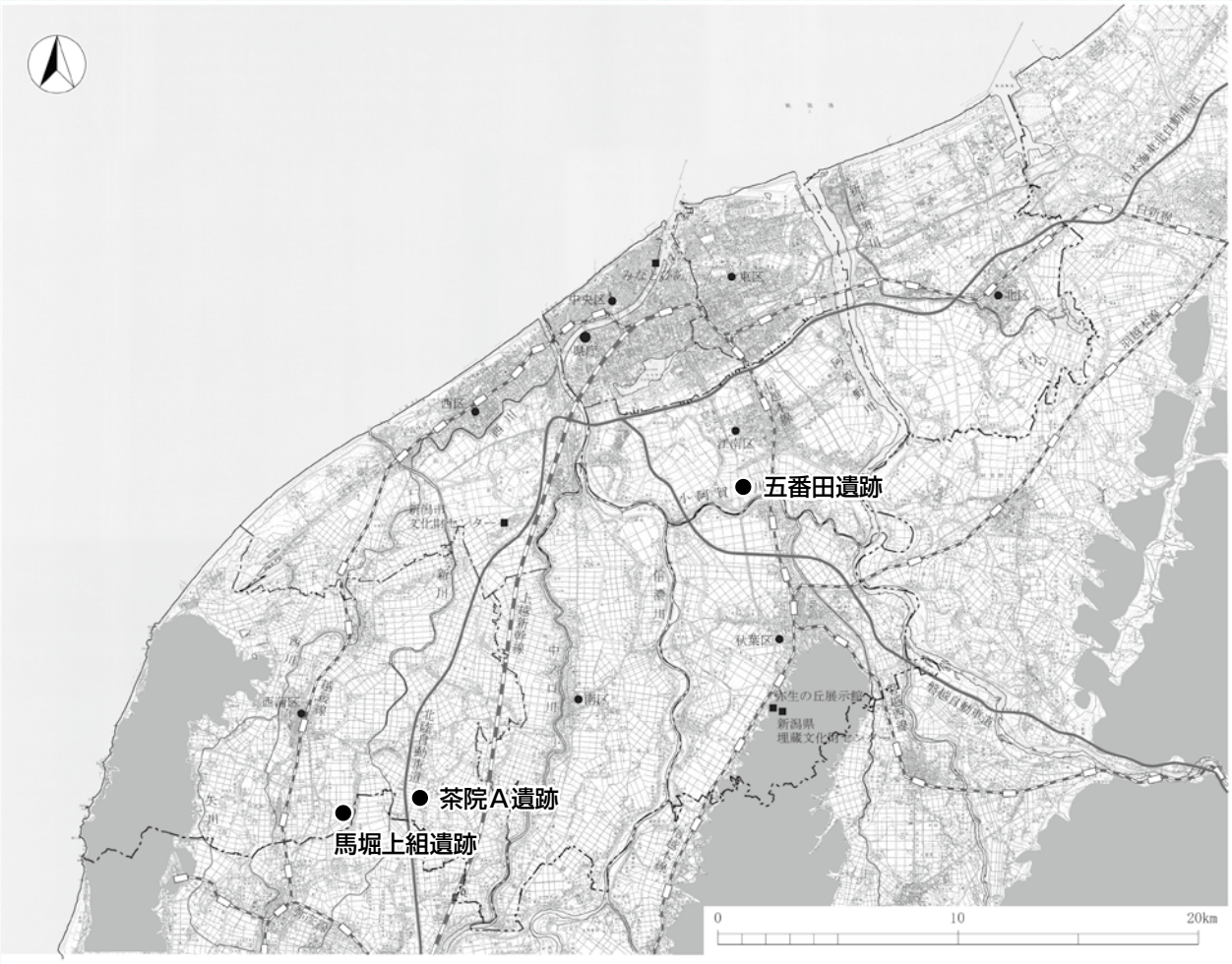
13：10～14：40　　講　　演　「越後の中世・近世初期集落」
矢田俊文（やたとしふみ）氏（新潟大学名誉教授）

14：50～15：10　　報　　告　「五番田（ごばんだ）遺跡　2000年ぶりに姿を現した砂丘と遺跡」
牧野耕作（まきのこうさく）（文化財センター）

15：10～15：30　　報　　告　「茶院（ちゃいん）Ａ遺跡　発見！奈良時代のキッチン付き住居」
今井（いまい）さやか（文化財センター）

15：30～15：50　　報　　告　「馬堀上組（まぼりかみぐみ）遺跡　中世の大きな井戸」
長谷川眞志（はせがわまさし）（文化財センター）

15：50～16：05　　閉会後、ロビーにて質問受付




発掘調査遺跡位置図

# 越後の中世・近世初期集落

新潟大学名誉教授　矢　田　俊　文

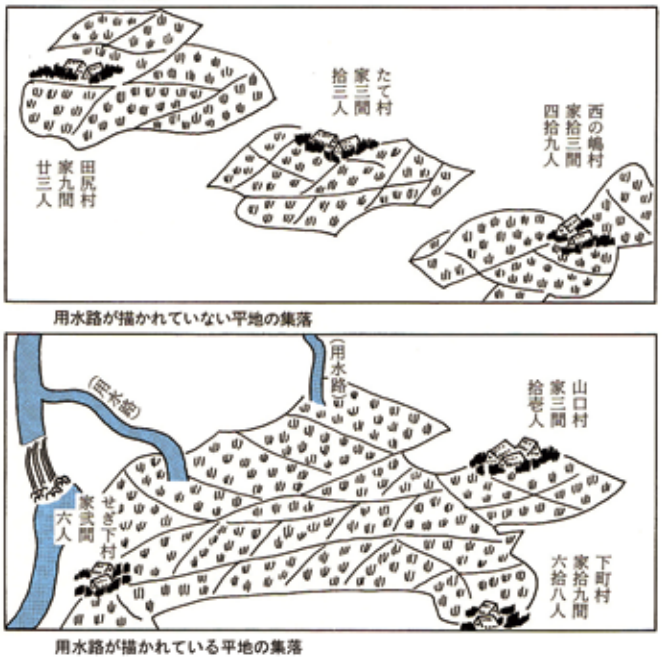
## はじめに

東日本では15世紀末までに集落は集村化が終了し、16世紀になると近世・近代の集落につながる集落が成立します。西日本では15世紀までに集村化が終了しています。古代・中世に大きく移動していた集落はこれ以後、現在に至るまで集落は移動しません。16世紀末に作成された頸城郡絵図によって集村化した村がどのようなものだったのかを見てみましょう。第1図16世紀末頸城郡絵図の集落をご覧ください。

郡絵図には複数のムラを耕地がつなぐように描かれる景観は少なく、多くは耕地と一つのムラが孤立して描かれていいます。現在の田は一面に続いていて、どこまでがどの集落の田なのか見分けがつきません。これは遠くの河川から引いてくる用水を複数の集落が利用するためにそのような風景ができあがるのです。

第1図下の用水路が描かれている平地の集落には、河川から引いた用水によって潅漑を行っている耕地とムラが描かれています。そしてどこまでがどの集落の田なのか見分けがつかない点は現在の景観に近いのです。

しかし、第1図下のような村はまれで、多くは第1図上の用水路が描かれていない平地の集落のように集落ごとに耕地がまとまっていて、さらにその集落ごとの耕地は他の集落の耕地と区別されて存在しているのです。集村化した集落は川から水を引いて田地を潤すような集落ではなかったのです（矢田2005）。




第１図　16世紀末頸城郡絵図の集落

## 1　15世紀末に集村化した集落の水田

15世紀末に集村化した集落の多くが川から水を引いて用水にしていなかったのですが、では15世紀末に集村化した集落はどうやって水田を開いていったのでしょうか。頸城平野において16世紀末までに集村化した集落の水田について明らかにしたのは地理学の籠瀬良明氏でした。籠瀬氏は集村化した村は旧河道を水田に利用したとされます。籠瀬氏は、自然堤防に挟まれた保倉川旧河道跡の水田のみを占有する松橋・舟津（ともに新潟県上越市頸城区）は遅くとも16世紀末には存在していた村である（籠瀬1975）とされています。

旧西蒲原郡地域でも集村化した村が旧河道を水田としていた事例があります。燕市の佐渡山村です。亀井功氏は、寛延元年（1748）佐渡山村絵図には茅刈川という小字名がある。いつの頃からか、茅刈川は河川の機能を失い、水田へと変わっていった。慶安2年（1649）佐渡山村検地帳によると、小字茅刈川の水田はほとんどが本田で、等級は上田である。茅刈川が河川の機能を失った時期はかなり早い時期だったことが想定される（亀井2003）と論じておられます。

寛延元年佐渡山絵図（新潟県立図書館越後佐渡デジタルライブラリー）を丹念に見ると、旧茅苅川跡田地は現在の集落に沿ってまっすぐに伸び、最後は南西の方向に曲がっています。旧茅苅川は米納津（燕市）

のあたりから佐渡山を通り、漆山（新潟市西蒲区）方向に向かい、最後は鎧潟（西蒲区、今はない）に流れ込んでいたのではないでしょうか。

旧茅苅川跡の近くにある佐渡山村の本土寺は、本山本成寺五祖日顕が文明元年（1469）に建立した寺院です（寛文12年本山宛本土寺四世日種･佐渡山村肝煎六左衛門本土寺起立につき書上、吉田町史資料編3)。また旧茅苅川跡の近くに中世後期の佐渡山城跡があり、天正13年（1585）に蓼沼忠右衛門が上杉景勝から所領を給与されたところです（新潟県史資料編5)。佐渡山村の近世初頭の村高は711石2斗でした（元和4年〈1618〉長岡藩知行目録、新潟県史資料編7、以下村高は711石余と記す)。佐渡山村は旧茅苅川跡を水田として開発することによって、15世紀後半から集村となっていったものと思われます。

旧河道を水田にしていることがわかる事例としては、ほかに蒲原郡横越島の木津村（新潟市江南区）があります。木津村は、慶長3年（1598）頃の御領内高付帳（新発田市史資料3）に、「横越村〈木津・相見・小杉・一市村共〉」（〈　〉は割書、以下割書を〈　〉として示す。相見は沢海、一市村は一日市村）196石余と見えますので、木津村は16世紀には集村化していた村であると推定できます。享保2年（1717）成立の「木津村古老伝在来帳」（横越町史資料編）という史料には、「昔川ハ田と成ル、小池田・亀池・蟹ヶ淵といふ」と記されています（南2003は、旧河道と小池田・亀池・蟹ヶ淵の位置を図で示している)。昔は川であったところが田地となった。その田は小池田･亀池･蟹ヶ淵というと記されています。小池田･亀池･蟹ヶ淵のうち小池田は近代の更正図（新潟市文書館）に小字名として残っています。この昔というのはいつ頃のことを言っているのでしょうか。「木津村古老伝在来帳」には木津村の用水について、寛永年中（1624～1644）に下木津惣内脇に水樋をふせて用水としたと記されています。寛永年中に水樋という装置を用いて田に水をそそぎ入れ始めたのですから、旧河道を田としたのは寛永年中より前のことになります。16世紀から近世初頭までは、木津村の田地は旧河道にあったと考えていいのではないでしょうか。

以上、旧河道を水田として使った事例を三つ紹介しました。中世の散村が15世紀末に集村化した要因の一つは、集落が立地する自然堤防のそばの旧河道を開発して水田にしたことによるものと思われます。

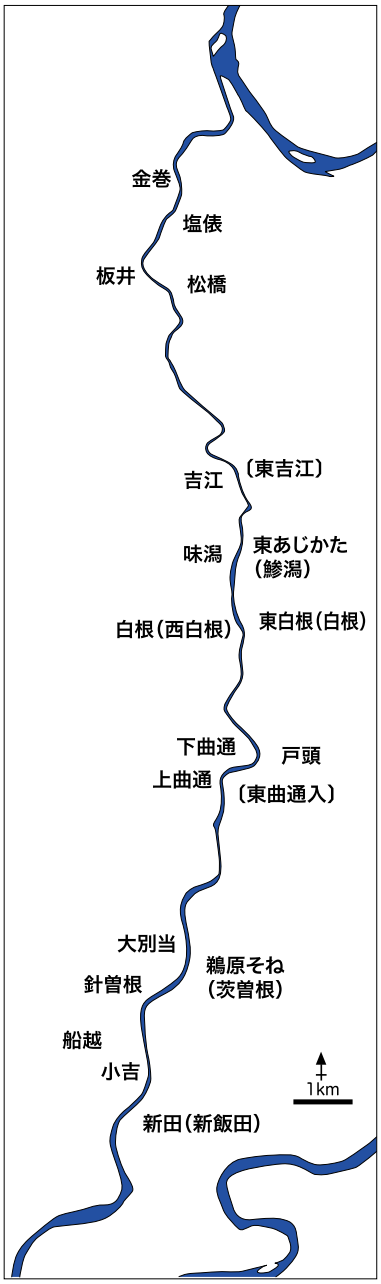
## 2 中世・近世初期の村と集落

近世前期に開発によって越後の集落・村は大きく変容します。したがって近世の史料を使って中世の集落・村を考える場合は慎重でなくてはなりません。先ほど見た佐渡山村の場合は断片的ながら中世後期の史料・遺跡がありましたので、佐渡山村が中世後期から集落があったところであることが推定できます。しかし中世後期の史料がない村も多くあり、そのさいは慶長・元和期の史料を使って考える必要もあるでしょう。

中世後期の集落・村を検討することのできる慶長・元和期の史料は、旧西蒲原郡とその周辺地域を中心に考えると、主なものとして慶長3年（1598）頃の御領内高付帳（新発田市史資料3)、元和4年長岡藩知行目録、元和6年（1620）三条藩知行目録（新潟県史資料編7）をあげることができます。これらの史料から打越村・茨曽根村・巻町村・小吉村・加茂町村・米納津村の村高は、打越村156石余・茨曽根村971石余・巻町村1346石余・小吉村1065石余・加茂町村442石余・米納津村964石余であることがわかります。ここにあげた村々の村高を比べると、打越村（新潟市西蒲区）の村高156石余（元和6年〈1620〉三条藩知行目録）が最も低くなっています。打越集落の側には中世の遺跡・遺物を出土する茶院Ａ遺跡がありますので、中世に茶院Ａ遺跡のあたりに住んでいた人は16世紀には移動して打越集落を作ったものと思われます。打越村の156石余を16世紀の開発の結果だとすると、沼や潟の開発はほとんど行わず、別の箇所を開発し用水を確保したことになります。すでにみてきたように、頸城郡の松橋・舟津集落は保倉川旧河道を水田にし、蒲原郡の佐渡山集落は旧茅苅川を水田として活用しており、旧河道を水田としたケースを打越村でも想定しなければならないでしょう。

打越村は万治2年（1659）の年貢割付状（沢家もんじょ2）によると村高1950石余の大村となります。村

高は39年間で156石余から1950石余と12.5倍になっています。これは打越集落を囲む沼や潟などを開発した結果であろうと思われます。近世の文書で打越村の北にある漆山村の境界付近に羽白潟（沢家もんじょ）があり、近代の更正図（新潟市文書館）で小字茶院の南に小字川根潟があり、小字茶院の西に小字上沼・下沼があったことが確認できます。




第2図　天正五年（一五七七）～寛永十三年（一六三六）の新潟県中ノ口川周辺の村
ベースマップは明治四四年測図（典拠）天正五年三条領欠所帳・給分帳、慶長三年頃新発田藩の御領内高付帳、元和六年稲垣氏（三条藩）知行目録、寛永十三年新潟与亥御成ケ本帳

第2図は中ノ口川周辺の近世初頭の村です。ここには小吉村が見えます。元和6年（1621）には小吉村は1065石余でした。小吉村はなぜ村高が大きいのでしょうか。それは小吉村の範囲には多くの村を含んでいたからです。元禄13年郷帳を見ますと、高野宮村は古は小吉村、中村は高野宮村枝郷、六分村は高野宮枝郷とあります。のちに藩（村上藩）の所領の単位として名前が登場する高野宮村・中村・六分村の村高が元和6年の段階では小吉村の村高に入っていたのです。

次に村高964石余（元和4年長岡藩知行目録）の米納津村（燕市）を見てみましょう。米納津村は文明10年（1478）に創建された本成寺末寺の本徳寺（元禄9年12月15日本徳寺日定本徳寺起立の事に付き書付、吉田町史資料編3）がありますので、15世紀末には集村化していた集落と考えられます。

さて、米納津の津とは湊のことであり、中組遺跡（燕市）からは「池津」と書かれた墨書土器が出土している古代より重要な地域で、そのことは中世も変わりはありません。米納津は舟運の要衝である港を中心に設定された国衙領の単位所領でした（田村1993）。

応永13年（1406）11月21日足利義満御判御教書（新潟県史資料編5）をみてみましょう。

越後国蒲原郡内吉田保并同郡米宇津事

右、任上杉民部大輔入道常越寄進状、等持院領掌不可相違之状、如件、

応永十三年十一月廿一日　　（花押）

この文書は、越後守護上杉民部大輔入道常越（房方）が自ら掌握している国衙領吉田保と米宇津（米納津）を京都の等持院に寄進し、それが等持院の所領になったことを将軍足利義満が保証したものです。この所領を安堵された米納津とは港のことではありません。舟運の要衝である港を中心に設定された国衙領の単位所領です。この時、同時に保証された吉田保も同様で、近世の吉田村地域のことではありません。庄と同じく、吉田保・米宇津（米納津）の保・津はともに中世の支配の単位であり支配領域を持っていました。

たとえば、三条を本拠とする山吉氏の家臣の所領を示す天正5年（1577）三条欠所・給分帳（新潟県史資料編5）には「吉田之内富なか村」「吉田之内こうのす村」が見えます。富永村・鴻巣村は吉田（元の吉田保）の下位の支配単位であったことがわかります。三条欠所・給分帳の「吉田」と同様に、米納津も広い範囲を支配していました。

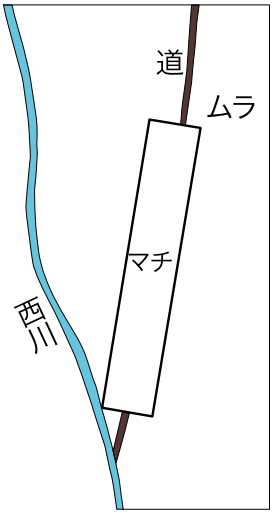
近世米納津村のうちには、米納津集落だけではなく、稲葉・新保・四十石新田という集落（皇国地誌）を含んでいました。さらに元禄13年郷帳によると、庚塚新田村・大保新田村・花見新田村が米納津村枝郷とありますので、庚塚新田村・大保新田村・花見新田村の地域は近世初頭の段階では米納津村の村高のう

ちに含まれていました。

小吉村・米納津村の村高が大きいのは、村の領域が広く、村のなかに複数の集落・村を抱えていたからです。一つの集落が一つの村になるのではなく、一つの村には複数の集落を抱えていました。また、藩が支配単位とする所領目録に載る村と検地の単位の村とは違う場合がありました（矢田2002）。村の中には複数の集落、複数の村を持った村があったのです。ですから、近世初頭の打越村などと比べてはるかに村高の大きい村が存在しました。

村高が大きい村のうちには、村の中に町を抱える村も存在しました。次に1346石余（元和4 年長岡藩知行目録）の巻町村を例に考えてみましょう。巻町村という表記は正保2年（1645）越後国絵図（新発田市デジタルアーカイブ、史料では槇町村）から採りました。巻町村は元禄13 年郷帳には、「巻村、古は槇町村」と記されています。

巻町村には巻館跡があります。その館の東境が近世そして現在の巻の中心街につながる地点にあたり、そこに15世紀代の珠洲焼が出土しています。また、天正12年（1584）の泉沢河内守久秀（いずみさわかわちのかみひさひで）に宛てた甘糟近江守長重（あまかすおうみのかみながしげ）書状（歴代古案第四）によりますと、人質を三条城（三条市）に送り上杉景勝方に従っている天神山城（てんじんやまじょう）（新潟市西蒲区、旧岩室村）の小国（おぐに）氏は、巻地域を支配していたことがわかります。巻地域は戦国期からこの地域の中心地として存在していたものと思われます。慶長20年（1615）の「木仏留」には、「越後蒲原郡槇町妙光寺」（木仏之留御影様之留）とありますので、1615年時点で巻町に妙光寺という浄土真宗の寺院があったことが確認できます。妙光寺はいまも巻の中心街にある寺院です。1615年には巻に「町」があったのです。幕府の支配単位の原則は村でしたので（矢田2002）、巻は村です。しかし村の中に町を含んでいましたので、正保2年越後国絵図では巻町村と表現したものと思われます。



第３図　近世初期越後国蒲原郡巻町村模式図

いま申しましたことを図にしたものが第3図近世初期越後国蒲原郡巻町村模式図です。元和4年時点で1346石余という村高を持った巻町村は村の範囲の中に町があるので、村高が大きいのです。

村の中に町がある事例としては、ほかに加茂町村（442石余、慶長3頃新発田藩御領内高付帳、新発田市史資料3）がありますので、次に加茂町村についてみてみましょう。

加茂町村は慶長3年頃の領内高付帳には「加茂町、加茂村共に」とあります。加茂町村は加茂町と加茂村で成り立っていたように読めます。また慶長17年（1612）の御蔵納同払方帳（新発田市史資料3）には「加茂町〈石田村･石川村〉」と記されています。加茂町村は加茂町と石田村･石川村で構成されていたのです。慶安元年（1648）加茂村下条村村境裁許絵図（むらざかいさいきょえず）（加茂市史資料編2）には、加茂町が描かれ、加茂町とは別に石田村・石川村が集落として描かれています。加茂町村は町と村の集合体だったのです。

近世の支配の単位は村です。村の中には町や村や集落を含む場合がありました。越後国の場合、16世紀には集村となったと推定される近世初頭の村には村高の差がありましたが、大きな村高をもつ村はその中に町や複数の村・集落を組み込んでいましたから、村高が大きくなるのです。一つの集落や二つの集落が村となった場合は近世初頭の段階で156石余（打越村の例。打越村は打越本村集落と西村集落の二つの集落で構成されている）という村高の村は小さな集落ではないのです。

**おわりに－災害・環境と集落**

最後に、中世集落と災害・環境との関係について述べたいと思います。大沢谷内（おおさわやち）遺跡（新潟市秋葉区）は15世紀前後を境にばったり資料が出なくなる。その原因は江戸時代の絵図の中に鎌倉潟（かまくらがた）が描かれていて、大沢谷内遺跡もその中に入ると推測されるからである（相田2021）とされています。鎌倉潟が描かれた絵

図とは、元禄10年（1697）頃の小須戸組・新津組絵図（新発田市立歴史図書館所蔵「小須戸組・新津組絵図」）のことです。小須戸組・新津組絵図には年号は記されていませんが、ほぼ同じ絵図に元禄10年と記されているので、元禄10年（1697）頃に描かれた絵図として間違いないでしょう。発掘の成果によると、大沢谷内遺跡は15世紀前後に鎌倉潟が形成されたため、その後の資料が出てこなくなるのです。この鎌倉潟は近世後期になって開発され消滅しました。

大沢谷内遺跡の発掘によって15世紀前後に潟が形成されたことを明らかにしたのは考古学の大きな成果です。では、潟が形成された原因はなんでしょうか。相田泰臣氏は、15世紀前後に河川の氾濫などを受けて湿地帯ができ、深い部分については潟になった。そして、それが原因で大沢谷内遺跡の集落については廃絶、移動を余儀なくされた（相田2021）と説明されています。相田氏は河川の氾濫で潟ができたとされるのです。前山精明氏は、大沢谷内遺跡の潟について何らかの地殻変動によって潟が生成した（前山2012）とされています。

地震によって潟ができたのであれば納得しやすいのですが、応永年間（1394～1428）に地震があった記事は、近世に成立した『越後野志』や『越後年代記』（『新撰越後国年代記』、矢田・相沢2005）に出てくるのですが、同様の記事が慶長年間（1596～1615）に刊行された『重撰倭漢皇統編年合運図』（国立公文書館内閣文庫）にも出てきますので、『越後野志』や『越後年代記』に載っているからといって越後に被害をもたらした地震かどうかはわからないのです。文献研究では15世紀前後に潟ができた原因を探るのは無理のようです。考古学の成果によって15世紀前後に潟ができたことを明らかにされたのですから、その原因の究明も期待したいと思います。

潟が多くて中世遺跡が少ない地域は他にもあります。蒲原郡横越島地域には、木簡が出土する駒首潟遺跡（新潟市江南区亀田早通）などの古代集落はあるのですが、中世集落はあまり多くありません。

牛道遺跡（江南区曙町周辺、旧亀田町）は、平安時代の活動痕跡が確認できるが、その後は低湿な土地に打ち克つことができず、近世まで村として確立できなかった。このことは中世の遺物がほとんど出土しなかったこととも一致する（立木（土橋）1999）とされています。

文献資料でこのことを確かめてみましょう。蒲原郡横越島地域のうち慶長17年（1612）までに成立した村（新発田市史資料3）を探しますと、一つの例外を除いて、すべて信濃川・小阿賀野川・阿賀野川近くの自然堤防上にあります。例外は袋津村だけです。寛永16年（1639）横越島絵図（新潟市合併町村の歴史史料3掲載カラー写真）をみますと、鳥屋野潟だけではなく、なが潟・へら潟・面て潟・尾長潟など多くの潟が見えます。9世紀後半～10世紀前半の木簡が出土する駒首潟遺跡や牛道遺跡がある地域は、中世には低地が沈むことにより潟が形成され集落が形成されなくなったのです。この地域の発掘報告書を読むと中世集落は確認できないということは指摘されているのですが、その原因を知りたいと思います。文献による研究では近世初頭までに形成される集落は信濃川・小阿賀野川・阿賀野川などの大河川付近にある自然堤防上であることは明らかにできるのですが、寛永16年の絵図に潟が描かれるような地域には平安期まで集落があったのに、中世に入ると集落は存在しなくなった理由を説明できません。中世集落が存在しなくなった理由を知りたいと思います。

【参考文献】相田泰臣2021「縄文から中世の大沢谷内遺跡」『令和2年度 史跡古津八幡山弥生の丘展示館企画展関連講演会 記録集』新潟市文化財センター／籠瀬良明1975『自然堤防－河岸平野の事例－』古今書院／亀井功2003「佐渡山内堀開削」『吉田町史 通史編 上巻』吉田町／立木（土橋）由理子1999『牛道遺跡』新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団／田村裕1993「燕周辺の保と津」『燕市史 通史編』燕市／鳴海忠夫1993「佐渡山城跡」『まきの木』61巻郷土資料館友の会／前山精明2012『大沢谷内遺跡Ⅲ 第18次調査』新潟市教育委員会／南憲一2003「中世の村々」『横越町史 通史編』横越町／矢田俊文1990「中世後期越後国の集落に関する二つの課題」『かみくひむし』80かみくひむしの会／矢田俊文1991「中世越後における集落の移動に関する一考察」『新潟史学』26新潟史学会／矢田俊文2002『日本中世戦国期の地域と民衆』清文堂／矢田俊文2005『上杉謙信』ミネルヴァ書房／矢田俊文・相沢央編2005『新撰越後国年代記』新潟大学／山口栄一1994「巻館跡」『巻町史 資料編1 考古』巻町

# 五番田遺跡

## －2000年ぶりに姿を現した砂丘と遺跡－

| | | | |
|---|---|---|---|
| 所在地 | 新潟市江南区茅野山 | 調査原因 | 主要地方道新潟中央環状線新設工事 |
| 調査期間 | 令和6（2024）年9月5日～11月13日 | 調査面積 | 1,415㎡ |

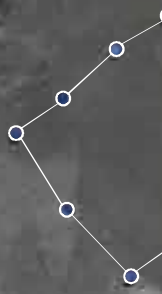
調査前の様子（7月初旬）

調査後の様子（11月初旬）

| 縄文時代 | | | 弥生時代 | | 現在 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 7000年前 砂丘ができる | 5500年前 人が住む（前期） | 2900年前 人が住む（晩期） | 2000年前 人が住む（中期） | 1800年前 砂丘が埋没 | 2021年 試し掘り | 2024年 発掘調査 |

2021年 試し掘り：最も内陸側の砂丘を発見 + 五番田遺跡を発見

2024年 発掘調査：遺跡の砂丘は茅野山の砂丘の一部 + いろいろな時代に人がいた



弥生時代

一番深いところは

上空から見た五番田遺跡
まとまって出た石
きれいに敷き詰められた
縄文土器
縄文時代の
建物
縄文時代の人が主に活動した
と考えられる範囲
地面から3.3m下
水田の土
沼地の土
土器が出る土
砂丘の砂
縄文時代の人が主に活動したと考えられる範囲
標高
東側の壁の土の堆積

（牧野耕作）

# 茶院（ちゃいん）Ａ遺跡

## 発見！奈良時代のキッチン付き住居

**所在地** 新潟市西蒲区打越　　**調査原因** 打越地区県営ほ場整備事業

**調査期間** 令和６（2024）年６月24日～11月15日　　**調査面積** 1,710㎡

茶院Ａ遺跡は、西蒲区旧鎧潟（よろいがた）の南４kmに位置し、現況は標高2.0～2.4mの水田地帯です。現在遺跡の東側には打越（うちこし）の集落が南北に細長い自然堤防上に形成されています。本発掘調査は、令和４（2022）年度から開始し、今年度は用排水路敷設が予定されている３路線分について発掘調査を行いました。今年度の調査区は、便宜上北から７区・８区・９区と呼称します。

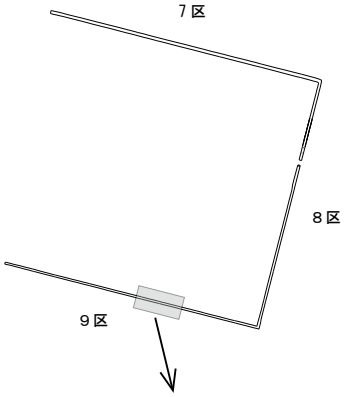
令和６年度の調査では、古代（奈良・平安時代）と中世（鎌倉・室町時代）の遺構が見つかりました。古代の遺構は、中世以降の遺構に壊されてほとんど残っていませんでしたが、７区と９区の東西およそ80ｍの範囲に集中して竪穴（たてあな）建物や溝などが見つかりました。９区で検出された竪穴建物SI90は、１辺が3.2ｍのやや小規模な建物でした。調査区の幅が1.8mと狭く、建物の４分の１しか調査できませんでしたが、建物の南端で火を焚いた跡が確認できました。この建物からは奈良時代（８世紀頃）に使われていた煮炊きをするための土師器（はじき）長甕のほか、先端の尖った角柱状の土製品が２点出土しました。この土製品は、組み合わせてカマドの芯材にしていたと考えられるものです。同じ西蒲区の下新田（しもしんでん）遺跡のほか、燕市の小諏訪前（こすわまえ）遺跡や三角田（さんかくだ）遺跡など西蒲原郡域の遺跡で出土例が目立つ遺物です。西蒲原では、このような芯材を使用したカマド（現在のキッチン）付きの住居が一般的なスタイルだったのかもしれません。また、この土製品が出土する遺跡では、甑（こしき）という底に穴の開いた土器が必ずといっていいほどセットで出土します。茶院Ａ遺跡でも竪穴建物SI90では出土しませんでしたが、この甑が出土しています。甑では煮る調理ができないので、蒸す調理をしていたのではないかと言われています。

中世（鎌倉時代）は、出土遺物は少ないものの水田遺構や溝が確認されました。柱根（ちゅうこん）を持つ柱穴もいくつか検出しましたが、掘立柱（ほったてばしら）建物になるようには並びませんでした。また、昨年度の調査で確認された盛土整地層も、現在の道路の基盤砂で壊されていて、ほとんど検出できませんでした。一方、７区では、低地で水田遺構の輪郭がはっきりと確認できました。耕作の際、地山と攪拌（かくはん）されることによって作られた底面の凸凹もあり、牛の足痕も見つけることができました。茶院Ａ遺跡では、これまでも馬の歯や大型哺乳類の骨などが出土しており、牛や馬を水田で使役していたことが想定されます。茶院Ａ遺跡のある旧中之口村で、昭和20年代に撮影された農家の稲刈り後の記念撮影写真には、家族と一緒に牛や馬が写っています。トラクターが無い時代に牛や馬は貴重な動力だったことでしょう。このほか８区と９区でも水田遺構や畦畔が見つかっています。標高の低い東側の８区では、ほぼ全面が水田遺構でした。昨年度までの調査

調査地遠景（北東から）

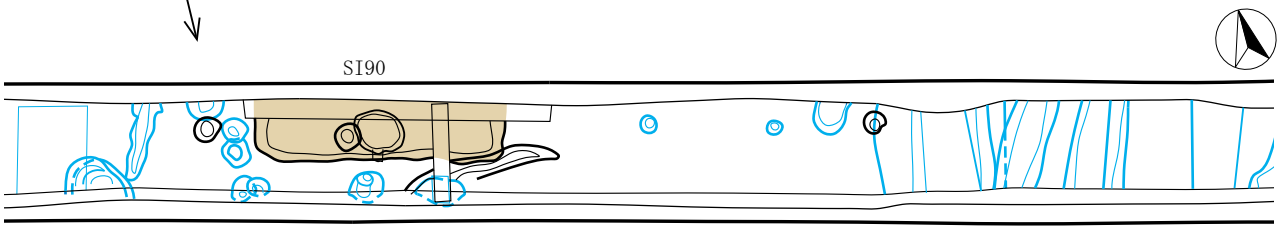
調査地空中写真（南から）

でも、遺跡の東側、現在の集落との境は水田遺構が発見されており、そこから出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ13世紀との測定値がでています。このことから、今年度発見の水田遺構も鎌倉時代のものと考えています。このほか、中国の唐や宋で使われていたお金（渡来銭）が９区から数枚出土しています。この時代は貨幣を輸入に頼っていたためです。茶院Ａ遺跡の南に接して茶院Ｂ遺跡があり、昭和30年頃ハサ木を立てるため穴を掘った際に渡来銭が100枚以上出土し、地元で保管されている記録もあります。このほか今回の調査では、中国龍泉窯（りゅせんよう）の青磁碗や能登半島の珠洲（すず）焼、中世土師器など、この時代の一般的な種類の陶磁器が出土しました。なお、これまでの調査結果から遺跡の南東側ほど、中世の遺構・遺物の量が多くなる傾向にあります。



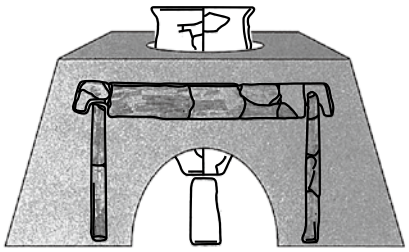
９区　竪穴建物　SI90（北から）

竪穴住居（再現イラスト）




９区　遺構平面図（部分）1/100　　青線は上層の遺構

SI90 出土
カマド部材（左）・土師器甕（右）



土製カマド部材の使用法
「越後国域確定1300年記念事業記録集」2013より

甑（こしき）（2023年度調査出土）

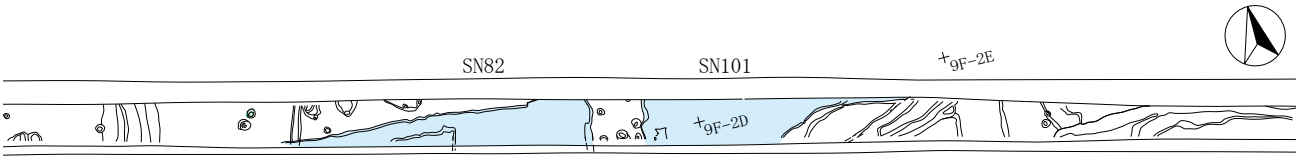
線刻文のある緑釉陶器

青磁（上段）と珠洲焼（下段）

渡来銭

水田遺構（SN82･101）全景

水田遺構（SN82）検出状況（東から）

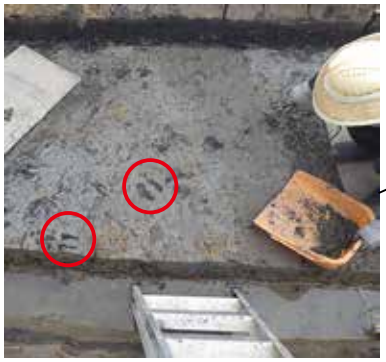



7区　遺構平面図（部分）1/300

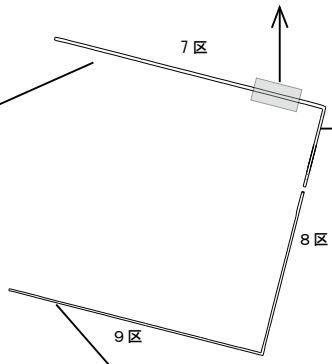
水田遺構（SN82）断面（西から）

水田遺構（SN82）（西から）

水田遺構（SN101）断面（西から）



7区　牛の足あと



8区　畦畔（西から）

昭和20年代　中之口糸郷屋（個人提供）

9区　連続する水田遺構（東から）

## ３年間の調査成果まとめ

３年間の調査成果から、茶院Ａ遺跡の姿が見えてきました。奈良時代には、南北に細長く延びる微高地上に住居（竪穴建物）や倉庫（掘立柱建物）が並んでいました。平安時代は、遺物の量から人の活動が最も盛んな時期であったと考えられます。生活に必要な焼き物がほとんど揃っているのはもちろん、緑釉陶器など貴重な焼き物の破片も見つかっており、ある程度の経済力を持った集落だったと想定されます。また、「宅」「宅成」と書かれた墨書土器は、この集落の有力者の名前を示しているのかもしれません。さらに、２本の丸木弓の出土からこの集落が兵を所持していた可能性もあります。鎌倉時代には、低地を埋め立てて整地し、柳の木を植栽した屋敷地を造成していました。東西の低地には水田が広がり、現在の打越集落の姿と重なります。時代はさらに下り15世紀にも整地を行った形跡があります。その後は、現在の打越の集落に移ったのか、住居などの生活痕跡は見られなくなります。　（今井さやか）

古墳時代の土器と
石製模造品が出土

「宅」記載の墨書土器が出土

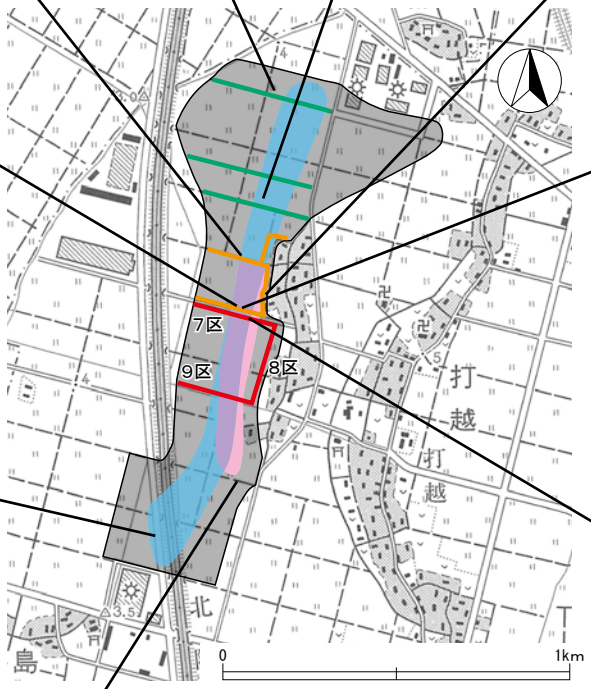
奈良時代の掘立柱建物

鎌倉時代の樹木（ヤナギ）列

丸木弓が出土

鎌倉時代の掘立柱建物

1973年
北陸道建設に伴う発掘調査
（新潟県教育委員会撮影）




茶院A遺跡範囲と時代別集落範囲
（新潟市発行の１万分の１地形図に遺跡範囲を追記して掲載）

鎌倉・室町時代の盛土層

2019年
工事立会で丸木弓出土

墨書土器「宅成」

「宅成」

# 馬堀上組遺跡

## －中世の巨大な井戸－

**所在地**　新潟市西蒲区馬堀　　**調査原因**　馬堀地区県営ほ場整備事業

**調査期間**　令和６（2024）年７月24日～12月７日　　**調査面積**　1,295㎡

馬堀上組遺跡は新潟市西蒲区馬堀地区のほ場整備事業に伴う事前調査で令和元（2019）年に新発見された遺跡です。工事で失われる範囲について、記録保存を目的とした本発掘調査を行いました。遺跡の東側には馬堀集落が南北に細長く延びています。

発掘調査では、中世（室町時代）の掘立柱建物・井戸・溝などの遺構が見つかりました。遺物は陶磁器・木製品・金属製品などが出土しました。

調査地遠景（南東から）

**遺構**　ほとんどが現集落寄りの東側で確認され、集落から離れる西側ほど希薄になります。

掘立柱建物は、重なり合う形で２棟確認できました。井戸は10基発見されましたが、そのうち２基は直径が４ｍ以上ある大型のものです。また、５基の井戸では黒い炭が層状に堆積していました。特に大型の井戸２基には炭が複数層にわたって分厚く堆積し、多数の遺物が出土しました。いずれも下部の中央が深くなる「凸」の字を逆さにした断面形状をしています。本来は板材などで壁面の崩落を防いでいたと考えられますが、木材や石組などの構造物は確認できませんでした。

大型井戸の堆積状況（SE20・上半部）

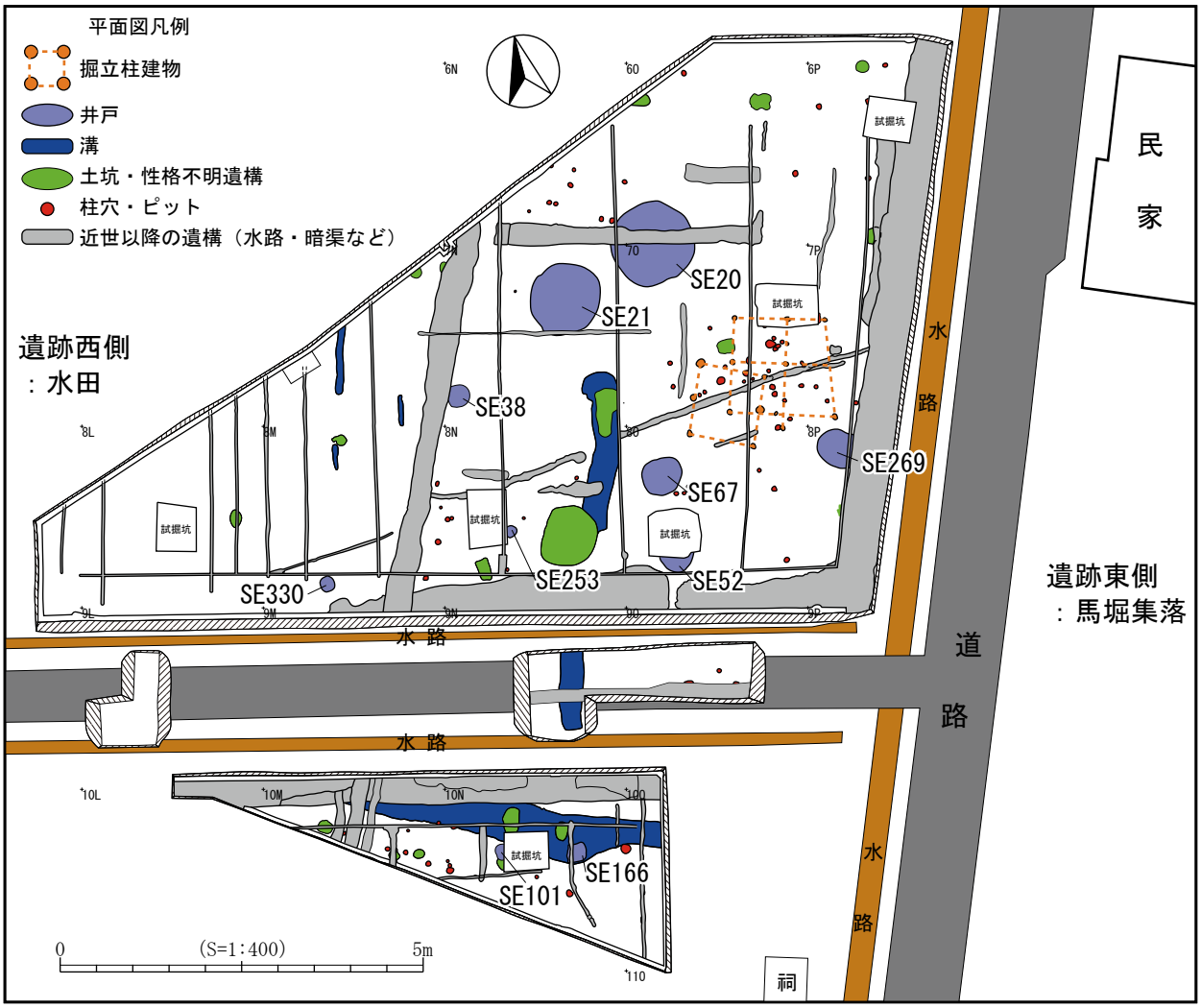
このほか、溝２条や土坑、性格不明遺構などとともに、近現代の水路の跡も多数見つかりました。

**遺物**　陶磁器類のほか石製品・金属製品・木製品などが出土しました。陶磁器類は、国産の珠洲焼や瀬戸焼のほか、中国製の磁器である白磁や青磁が多数出土しました。石製品は数点の砥石のほか、用途は不明ですが焼けた石が井戸から多数出土しました。金属製品は井戸から中国製の銅銭（渡来銭）が合計３枚出土しました。木製品は木簡・漆器椀・下駄・曲物底板・箸・板材などが出土しました。木簡は薄い板に「早生」と書かれているようですが、木簡の性格や時代などは現在検討中です。漆器椀は複数の井戸から合計７点出土しました。下駄や箸など用途の分かる製品もある一方で、加工痕はあるものの、劣化・損傷して用途の推測が難しい部材も多数あります。また、木製品の一部は焦げて炭化しています。

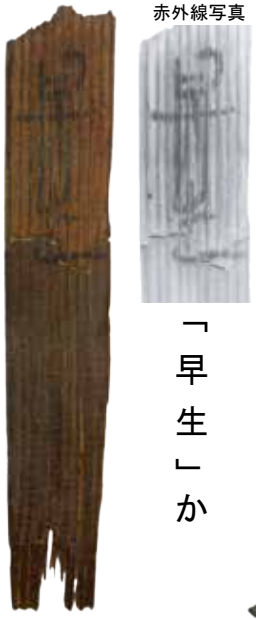
**まとめ**　馬堀上組遺跡に隣接する馬堀集落は、天正５（1577）年の三条城の所領に関する古文書に「間堀」と記されたのが最も古い記録とされています。今回の発掘調査ではそれよりも遡り、15世紀にはこの地で人々が生活していたことが分かりました。

大型の井戸２基から出土した陶磁器や石は接合関係にあることから、同時期に埋められたと考えられます。また、分厚く堆積した炭の層や炭化した木製品が出土しているため、この炭は人為的に埋められたと考えられます。使われなくなった井戸を埋める時に、何らかの祭祀を行ったのか、それとも不要なものを燃やしたときの炭を埋戻しに使ったのか、井戸の性格や埋めた状況についても検討していきます。

（長谷川眞志）




馬堀上組遺跡　遺構平面図(1/400)



赤外線写真

「早生」か

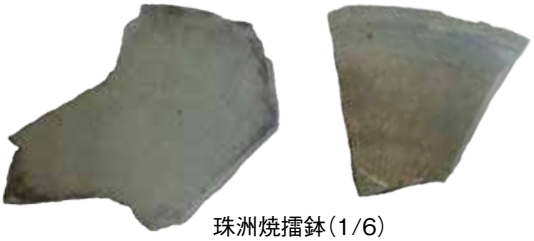
木簡(1/2)

渡来銭(1/2)

白磁皿･椀(1/6)

漆器椀(1/6)

青磁椀(1/6)



珠洲焼擂鉢(1/6)

瀬戸焼香炉(1/6)

0　木簡・渡来銭(1/2)　10cm

0　その他(1/6)　25cm

五番田遺跡

作業風景

現地説明会

現地説明会

茶院Ａ遺跡

作業風景

親子発掘体験

親子発掘体験

馬堀上組遺跡

作業風景

作業風景

現地説明会

編集・発行　新潟市文化財センター
〒950－1122　新潟市西区木場2748－1
電　　話　025（378）0480
https://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/rekishi/maibun/index.html
発　　行　令和7（2025）年2月7日